



未経験入社で、
最初の半年は
泣いてばかりでした

それでも私が、
この会社でリーダーを目指す理由。

「未経験入社で、最初の半年は泣いてばかりでした」それでも私が、この会社でリーダーを目指す理由。

今期、インサイドセールス部門でMVPを獲得し、入社3年目にしてチームリーダーに抜擢された佐藤（26）。常に笑顔でチームを鼓舞する彼女だが、入社当時は「毎日辞めることばかり考えていた」と語る。未経験での入社、同期との比較、鳴り止まない電話…。どん底だった彼女を救ったのは、ある上司の言葉と、ミライノ独自のカルチャーだった。一人の若手社員が、自信を取り戻し、リーダーとしての覚悟を決めるまでの軌跡を追った。

「勉強してから電話してこい」。受話器を持つ手が震えた半年間



「正直、入社して3ヶ月目くらいまでは、毎朝お腹が痛くて（笑）。駅のホームで電車を見送りながら、『このまま帰りたいな』って本気で思っていました」

そう苦笑いしながら振り返る佐藤の前職は、アパレルの販売員。「20代のうちにビジネススキルを身につけたい」「実力主義の環境で自分を試したい」という一心で、株式会社ミライノの門を叩いた。しかし、配属されたインサイドセールス（内勤営業）の現実は、想像を絶するものだった。

「当時のミッションは、とにかく架電数を稼ぐこと。1日100件以上の電話をかけ続けるのですが、知識のない私の話なんて誰も聞いてくれません。『忙しいから』と切られるのは良い方で、『二度とかけてくるな』『勉強してから電話してこい』と怒鳴られることも日常茶飯事でした」

さらに彼女を追い詰めたのは、同期たちの活躍だ。同じ未経験で入社した同期が次々と初アポイントを獲得し、社内のチャットツールで称賛されている。一方、佐藤の成績はゼロ行進。

「焦れば焦るほど早口になって、相手に怪しまれてガチャ切りされる。その繰り返しでした。オフィスに『おめでとう！』という拍手が響くたびに、自分がここにはいけないような気がして、トイレでこっそり泣いていました」

転機となった、マネージャーとの15分



入社から半年が経ち、いよいよ退職を申し出ようと決意したある日の夕方。マネージャーの田中（現・営業部長）に、「少しお時間いいですか」と声をかけた。会議室に入り、俯きながら自信のなさを吐露する佐藤に対し、田中は意外な言葉を投げかけた。

「佐藤さん、怒られるのが怖い？」

図星だった。「はい」と答えると、田中は笑ってこう続けた。

「俺たちはベンチャーだぞ？ 世の中にない新しい価値を作ろうとしてるんだ。正解なんて誰も知らない。だから、失敗しないことよりも、恐れて挑戦しないことの方が罪なんだよ。**お前がお客様に怒られたデータは、チームにとっての財産だ。だから、もっと派手に失敗してこい**」

そして、こう付け加えた。「売ろうとしなくていい。ただ、お客様が今何に困っているのか、それだけを聞いておいで。解決策は、僕たちが一緒に考えるから」

その言葉で、憑き物が落ちた気がした。「うまく話そう」「アポを取ろう」とするから怖かったのだ。私は自社の商品売り込みしたいだけの人になっていた。そうではなく、目の前の相手の役に立つた

めに電話をしよう。そう思考が切り替わった瞬間だった。

「佐藤さんだから話すけど…」。初受注が教えてくれたこと



翌日から、佐藤の電話が変わった。トークスクリプトを読み上げるのをやめ、相手の声のトーンに合わせて会話の速度を変えた。「結構です」と断られても、「そうですね、お忙しいですね。ちなみに、今はどんなツールを使われているんですか？」と、世間話のように質問を重ねた。

変化はすぐに訪れた。大田区にある町工場に電話をした時のことだ。普段なら門前払いの受付担当者が、佐藤の粘り強いヒアリングに根負けし、社長に取り次いでくれたのだ。

「社長は最初、警戒していましたが、『御社の技術力を、もっと若い世代に知ってほしいんです』と素直な思いを伝えると、『佐藤さんだから話すけど…』と、採用に関する深刻な悩みを打ち明けてくれたんです」

そのアポイントは、先輩の同行を経て、数百万円の受注につながった。受注が決まった瞬間、オフィス中が揺れるほどの歓声が上がり、田中マネージャーが誰よりも早くハイタッチを求めてきた。

「あの時の手の痛さは、一生忘れないと思います。私がここにいていいんだ、と初めて思えた瞬間でした」

プレイヤーからリーダーへ。失敗を恐れない文化を継承したい



現在、佐藤は5人のメンバーを抱えるチームリーダーとして活躍している。かつての自分のように、成果が出ずに苦しんでいるメンバーがいれば、まずはランチに誘い、じっくりと話を聞く。

「私がリーダーとして大切にしているのは、『心理的安全性』です。メンバーには『失敗しても私が責任を取るから、思いっきりやってこい』と伝えています。田中さんが私にしてくれたように、今度は私が、メンバーの背中を押す番だと思っています」

ミライノは現在、急成長のフェーズにあり、毎月のように新しい仲間が増えている。組織が大きくなればなるほど、効率やルールが重視されがちだ。しかし佐藤は、「泥臭い挑戦」を称賛するカルチャーだけは守り抜きたいと語る。

未来の仲間へのメッセージ



最後に、どんな人と一緒に働きたいかを聞いてみた。

「正直に言うと、ミライノは『楽な会社』ではありません。変化のスピードは速いですし、求められる基準も高い。安定だけを求めて入社すると、きっとギャップに苦しむと思います」

佐藤は真っ直ぐな視線でこう続けた。

「でも、もしあなたが『今の自分を変えたい』『悔しさをバネに成長したい』と思っているなら、ここは最高の環境です。失敗を笑う人はいません。転んでも、手を差し伸べてくれる仲間が必ずいます。

私のような泣き虫でも、リーダーになりました。次はあなたの番です。一緒に、見たことのない景色を見に行きましょう」